

巻頭言——新しがりやの病を治して、再び人が生きる道の復興 renaissance へ

Preface : Curing the disease of “a person who likes everything new,”
and then going on to the “re-” Renaissance of lifestyle

まったく新しい大発見はまれにしかないもので、多くは先人の刻苦奮闘の業績の上に、若干の新発見を付加し、地道に積み上げるということだと思えます。膨大な歴史に裏付けられた伝統文化に挑みながら、これに新しいものを付け加えていくことは、それでも容易な作業ではありません。ヨーロッパの再創作・再創造の方法論には安心できる長年の蓄積があると思えます。したがって、ヨーロッパの伝統文化と常に新鮮を求める現代文明の良いところは、参考にして受容すればよいのです。

しかし、日本では明治維新頃から、固有の伝統文化を軽視し、その良いところを捨ててまで、実利的な技術文明を人（猿）真似して、重宝がってきたのは、真に恥ずかしいと思えます。伝統文化を卑下して、外来文化を翻案し、舶来品をもてはやすのは近代日本人の伝染性「新しがりやの病」です。単に模倣するだけでは創造性は低く、伝統文化への付加、新たな蓄積も少ないのです。

今時の日本では、伝統技能にたけた職人は言わずもがな、また、最初に挑戦し、苦勞して基礎を築いた人も正当に評価せず、敬意を払わず、業績を引用もせず黙殺してしまいます。小賢しく二番手でうまく盗用まがいの模倣をした人を世間は誉めそやします。マスメディアには「露出」せずに、「幽谷深山 華自から紅なり」（三浦梅園）で、地道に研究も市民活動もするのがよいのです。流行・世論から「セレブ」・国会

議員まで、テレビが作っているのですよね。マスメディアや何とかフォンなどに依らないで、大切な事実や想いは口伝し合いませんか。多数に伝わらなくても、確実に伝わる方がよいのです。便利は楽チンですが、時には不便を深く、楽しく愛おしむことです。

もう、明治維新の哀れな呪縛、「〇〇洋才、脱亜入欧」を解きませんか。この呪縛に囚われなかった信念の人々がいたからこそ、継承すべき伝統文化が辛うじて保たれています。また、欧米からの模倣だといわれていた物事も、今では独自性、創造性を高めており、何ら見劣りするような水準にとどまってはいません。日本の伝統文化と世界の多様な暮らしの文化に学べば、現世の閉塞を開く方策も見えてくるでしょう。穏やかに、誇りをもって、ゆったりと過ごせばよいのです。

もっと心身を自律的に開放して、素のままの美しい暮らしをすれば、ゴッホが憧れた花のように自由な人生がこのくににも戻ってきます。家族のために自給農耕をし、自分で作った食べ物を美味しく調理すれば、家族が食べることを喜びとし、自分も心充たされます。自給自足ではなく、できるだけ自給「知足」すればよいのです。これこそが、人の生きる道の再生、復興、今度は、日本で再び (re-) ルネッサンスを起こしませんか。

黍稷農季人 (2015.6.6)

